

自由学芸教育のモデルとしてのグレート・ブックス・セミナー

杉 本 文 (財団法人 ハイライフ研究所)

松 田 義 幸 (実践女子大学)

The Great Books Seminar as a model of liberal education

Aya SUGIMOTO (Research Institute for Hi-Life)

Yoshiyuki MATSUDA (Jissen Women's University)

In this study, we propose the Great Books Seminar as a model of liberal education which is very important for leisure to cultivate humanity. By considering the history of the development of this seminar, clarifying the basic educational ideas of the seminar, and verifying the structure of the series to be textbooks, the following three points have been confirmed to be effective for liberal education;

1. Liberal education should be lifelong education. As the Great Books Seminar has the programs for basic school students, college students, and adults, it is suitable for liberal education.
2. Liberal education should serve for growing the responsibilities of citizenship which supports the democratic society, and help people lead good lives. The Great Books Seminar is organized based on the educational ideas mentioned above.
3. It is ideal that liberal education is available for anyone, anytime, anywhere. The Great Books Seminar has good textbooks for those purposes.

Keyword: liberal education, the liberal arts, the Great Books Seminar

1. はじめに

近年、経済的發展や自由時間の増大、情報化などにより人々の生活に対する価値観が変化してきている。地球環境破壊や民族紛争など地球規模の問題がますます身近になる一方で冷戦構造の崩壊や終身雇用の見直しなどでこれまで一般的であった世界観、人生観が当てにならなくなってきている。このような中で、レジャー・余暇の意義も変化してきている。ことに若い世代では仕事よりも余暇を重視する余暇重視派、あるいはどちらも同じくらい力を入れる両立派が増えている¹⁾。これは、余暇・レジャーの重要性に人々が気づき始めているということではないだろうか。レジャーは本来、古代ギリシアにおいてワークよりも重要なものと捉えられていた²⁾。ここでいうレジャーとは、自由な心で学問、文化に親しみ、自分本来に戻って人間性を高め全体性を取り戻すことである。つまり、「自由時間をいかに過ごすか」というだけでなく「自由時間を使っていかに人間性を高めるか」という点が重要なのである。

教育の面からこのことを考えると、ワークのための教育は専門的な職業訓練である。職業訓練は実践のための教育で、人間の特殊な一面だけに目を向け、同時に世界の一片だけに注目した教育である。これに対して、レジャーのための教育は自由学芸教育³⁾であり、自分と自分を取り囲む世界全体について知ることを目的とした教育である。このような自由学芸教育は人々を全体性に向かわせ、真の「教養」を養う⁴⁾教育で民主社会にとって欠かせないものである。

本論文では、この自由学芸教育の具体的方法のひとつとしてグレート・ブックス・セミナーが有効であることを次の3点において検討、考察する。

1. 自由学芸教育は、生涯を通じてなされるべきである。グレート・ブックス・セミナーのプログラムには、小・中・高校生向け、大学生向け、社会人向けのものがあり、生涯を通じて一貫した教育を受けることができるようプログラムされている。
2. 自由学芸教育は、民主的社會を支える市民を育てる教育であると同時に、人々が幸福な人生を送る手助けとなる教育でもなければならない。グレート・ブックス・セミナーはそのような教育理念の基に作られている。
3. 自由学芸教育は、誰もが、いつでもどこでも受け

られることが理想である。グレート・ブックス・セミナーには、そのためのよいテキストがある。

わが国ではこれまで、このセミナーを含む基礎的學校教育のカリキュラムについて80年代のアメリカの學校教育の流れとして取り上げられたことはある⁵⁾が、レジャーのための自由学芸教育として取り上げられたことはない。そこで本論文では、グレート・ブックス・セミナーの發展の歴史を辿り、その教育理念を明らかにし、セミナーのテキストとなる全集の構成を検証することによって、生涯を通じた自由学芸教育としてグレート・ブックス・セミナーが有効であることを検討、考察することを目的とする。

2. グレート・ブックス・セミナー發展の歴史

グレート・ブックス・セミナーとは、あるひとつの主題にしたがってグレート・ブックスを読み、それについて討論し合うことによって、その主題についての理解を深めるセミナーである。このグレート・ブックス・セミナーは、J. アースキン (John Erskine 1879-1951) がコロンビア大学で開いていたものを土台として、M. J. アドラー (Mortimer J. Adler 1902-) と R. M. ハッチンズ (Robert M. Hutchins 1899-1979) らが生涯学習の最も優れた方法のひとつとして發展させてきたものである (図1)。

アドラーは、コロンビア大学の学生であった1921年

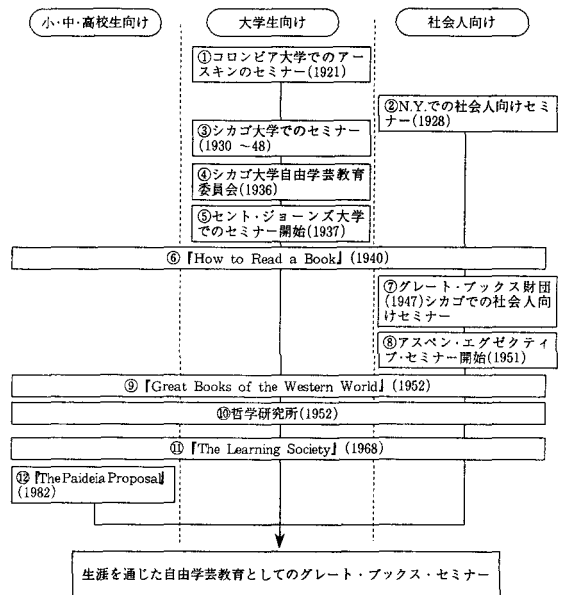


図1: グレート・ブックス・セミナー發展の歩み

にアースキンのグレート・ブックス・セミナーに参加していた(図1①)。それは、毎週古典を読み、ソクラテス式問答法による討論を行なうというものであった。学生たちには予め60冊のグレート・ブックスのリストが手渡されており、彼らは与えられたテーマにそってそのグレート・ブックスを予習してくる。セミナーではそれをもとに学生たちと教師が自由に討論するのである。グレート・ブックスには様々な著者の様々な意見がとりあげられており、それらを読むことによってそのテーマへの理解が広められる。またセミナーでは様々な意見のぶつかりあいの中でなにかが真実でありなにかが誤りなのかを考えることによって理解が深められるのである。

アースキンによるこのセミナーは、アドラーとM. V. ドーレン (Mark Van Doren 1894-1972) によって引き継がれ、1928年にはカーネギー財団の助成金を得て、ニューヨークで社会人向けのセミナーとしてデビューした(図1②)。これがグレート・ブックス・セミナーを社会人向けに行なった最初の機会であった。そのときコロンビア大学の哲学講師として勤めていたアドラーは、1930年にシカゴ大学の学長であったハッチンズから招かれ、1948年まで本格的に大学でのグレート・ブックス・セミナーの指導に取り組むこととなる(図1③)。ハッチンズは1936年に自由学芸委員会 (Committee on the Liberal Arts) を設置し、教養学部 of 全課程をグレート・ブックス・セミナーを中心とする必修科目とするという画期的な改変を行なった(図1④)。この改変はあまりに急進的だったために、専門研究を優先させている大学院、学部の反感を招き、ハッチンズがフォード財団に移るとともにもともに戻されてしまったが、1937年から現在までアナポリスとサンタフェにあるセント・ジョーンズ大学で同じカリキュラムが採用されている(図1⑤)。

アドラーはまた、大学という場以外でもより多くの人がグレート・ブックスを読み、理解を深め、教養を豊かにできるようにと、読書の大切さと本の読み方について書いた『How to Read a Book』⁹⁾を1940年に出版している(図1⑥)。この本は、年を追うごとにより多くのアメリカの読者に読まれ、さらにスペイン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、そして日本語に訳されている⁷⁾。

また、アドラーとハッチンズは、1947年に社会人向

けのセミナーを全米に広める目的でグレート・ブックス財団 (The Great Books Foundation) を設立した(図1⑦)。そしてその手始めとしてシカゴの市民リーダーのためのグレート・ブックス・セミナーを開いたのである。このセミナーは、重要な副産物を生んでいる。それは1952年にブリタニカ社 (Encyclopaedia Britannica) から出版された『Great Books of the Western World』⁸⁾ である(図1⑧)。これは全54冊からなる西洋の古典全集⁹⁾で、その内の2冊が『The Great Ideas, Syntopicon』という「概念」のレファレンスブックになっている。このレファレンスブックを制作するのにアドラーは8年もの歳月を費やした。そしてこの研究を続ける研究機関として、同年に哲学研究所 (Institute for Philosophical Research) を設立して自らその所長に就任したのである(図1⑩)。更に、このシカゴの市民リーダーのためのセミナーに参加していたのが、後にグレート・ブックス・セミナーを応用したエグゼクティブ・セミナーでアスペン・リゾートを発展させたペプケ夫妻 (Walter 1896-1960 & Elizabeth Paepcke) であった。

アスペン・リゾートはもともと銀鉱山で栄えた町であったが、1893年に貨幣制度が銀本位制から金本位制に移行すると鉱山は閉山へと追い込まれ、一気に過疎化が進んだ。最盛時には1万5000人以上いた人口が1000人にまで減少してしまったのである。そのようなときにこの地を訪れたペプケ夫妻は、その自然の魅力にひかれ、アスペンをスキー・リゾートとして生まれ変わらせることとした。ところが、スキーだけでは冬場の観光収入しか見込めない。そこでアスペンを一年を通じて人々が集まるような人間性と教養を養う生涯学習の拠点にする構想を立て、グレート・ブックス・セミナーを土台としたエグゼクティブ・セミナーをその中心に据えたのである(図1⑧)。エグゼクティブ・セミナーは24人が1チームとなり、2週間にわたってあるテーマに基づいた文献を読み、順番に進行役を務めながら討論するというものである。セミナーで使われる文献は、『Great Books of the Western World』をもとに、アスペン人文研究所が独自に編纂したものである。参加者たちは、このセミナーを通して、肩書きをはずしたひとりの人間として自分をとり囲む文化や自然、社会などについて改めて考え、人間性と教養を身に付けるのである。

一方ハッチンズは、1968年に『The Learning Society』¹⁰⁾を出版し、新しい学習社会ビジョンを提案した(図1⑪)。それは民主的な社会、政治を実現するためには、市民ひとりひとりが生涯にわたって教養を身につける機会を得られるような学習社会システムが必要である、というものであった。この学習社会という概念は、今日の生涯学習のコンセプトにも大きな影響を与えている。

また後年アドラーは、このような生涯学習の視点に立ち、なるべく若いうちから自由学芸教育の習慣を付けるべきだと考え、基礎的学校教育の抜本的な改革を求めた『The Paideia Proposal』を記した(図1⑫)。これは、アメリカの幼稚園から12学年までにおける、グレート・ブックス・セミナーを含む完全な必修課程について概要を述べたものである。

このような流れを追ってグレート・ブックス・セミナーは大学の教養課程から社会人のための教養講座へ、そして基礎的学校教育へと広がり、生涯を通じた自由学芸教育へと発展してきたのである。

3. グレート・ブックス・セミナーを支えるアドラーの教育理念

アドラーは基礎的学校教育の3本柱の目標として

- (1) 体系化された知識の修得
- (2) 知的技術の育成
- (3) 概念と価値についての幅広い理解力

を挙げている¹¹⁾(図2)。体系化された知識は、大きく分けて3つの具体的内容からなる。すなわち、言語・文学と美術、数学と自然科学、歴史・地理と社会科である。これらのものは現在多くの教室で行われているような講義形式による教授法で学ぶことができる(図

	①第1の柱	②第2の柱	③第3の柱
目標	体系化された知識の習得	知的技術の育成	概念と価値についての幅広い理解力
方法	・教授の考え方 ・講義と応答 ・教科書及びその他の補助教材	・コーチング ・練習 ・監督下での実習	・産婆術またはソクラテス式設問 ・能動的参加
具体的内容	・言語、文学と美術 ・数学と自然科学 ・歴史、地理と社会科	・読み方、書き方、話し方、聞き方 ・計算 ・問題解決 ・観察、測定 ・概算 ・批判的判断力の練習	・書物(教科書でない)や他の芸術作品についての討議 ・芸術的活動への参加 例えば、音楽、演劇、映像芸術

図2：基礎的学校教育の3本柱

2①)。知的技術とは、読み書き、話し方、聞き方、計算、観察、測定、批判的判断力などのことで、これらのものはコーチングと練習、実習によって学ぶことができる(図2②)。概念と価値についての幅広い理解力は、グレート・ブックス・セミナーのようなソクラテス式問答によって、あるいは芸術活動への参加によって得ることができる(図2③)。これら3つの柱のほかに補助的教科としての保健体育、技術家庭、そして様々な職業を知るための教科を加えたものが基礎的学校教育のカリキュラムにふさわしいものとしてアドラーが薦めるものである。グレート・ブックス・セミナーは3つの柱のうち理解力の拡大に最も貢献するプログラムであるが、同時に批判的に読書する技術、内省的に思考する技術、人の話を注意深く聞く技術、人に正確に話をする技術など、2番目の知的技術をも養う手段となる。

教育がこれら3つの柱を満たすべき理由についてアドラーは、民主的社会を担う子供たちにはすべて共通に、将来において市民としての責任を果たし、生計を立て、幸福な人生を送る権利と義務があるからである、と述べている¹²⁾。

民主的政治と教育の関係について最初に述べたのはJ. デューイ(John Dewey 1856-1952)であった。アドラーによると、デューイはその著書『Democracy and Education』の中で、民主的社会はすべての子供に量的だけでなく質的にも同じ公教育を与えることによって平等な教育の機会を用意しなければならないと述べている¹³⁾。今日のアメリカでは量的には教育機会の均等が実現されているが質的な平等ははまだ実現されていない。学校を卒業したあとで、職業につくものと進学するものに分けられ、異なった教育が行われているのである。すべての人に同じ質の教育をとというのは、すべての人に同じ質の高い教育をとということである、とアドラーは述べている¹⁴⁾。このことについてハッチンズは著書『The Learning Society』の中で「最善の人々にとって最善の教育は、すべての人にとって最善の教育である」と述べ、「そのような教育とは生徒に知的作業の技術を与え、生徒が属している知的な伝統に熟知させ、新しい世界を開かせるような教育である」としている¹⁵⁾。そしてアドラーは、そのような教育こそ自由人を育てる自由学芸教育であると述べる¹⁶⁾。自由人とは、民族や文化、時代などの偏見に束

縛られない自由な理性を持った人のことである。そしてそのような自由人こそ民主的を存続し、繁栄させる最も貴重な人的財産なのである。その自由人が持つべき自由で権威ある理性を身につけるには、様々な知的伝統のなかから普遍的倫理基準を見つけだす知的技術を習得する必要がある。現在直面している問題をあらゆる角度から客観的にとらえ、最も賢明な解決策を見出す理解力、洞察力が必要となってくるのである。このようなことから民主的社會には自由学芸教育が欠かせないとアドラーは述べている¹⁷⁾。

更に、生計を立てるために自由学芸教育が必要な理由としてアドラーは、子供たちが将来生計を立てていくためには、ある職業にしか役に立たないような職業教育を受けるよりも、むしろすべての職業に必要な能力、すなわちコミュニケーション能力を養っておく必要があるからであると述べる¹⁸⁾。科学技術が進み、短期間のうちに次々と新しい技術が導入される今日、学校でなされる職業教育は、ほとんど無意味なものとなってきている。そのため職業的専門的教育を成すよりも、すべての職業に共通して必要な一般的教育を成す方が、より実践的なのである。

また、自由学芸教育が幸福な人生を送るための教育であることについてアドラーは次のように説明する¹⁹⁾ (図3)。幸福には、心理的幸福と倫理的幸福の2つがある。倫理的幸福とは人生のある時点で到達できるようなものではなく、幸福な人生全体のこと、それは常に人生を良いものにしようと思心掛けることによつてのみ達成される。これには良い欲望と悪い欲望との区別があり、アリストテレス (Aristotle 384-322 B.C) によると良い欲望にしたがって良い選択をし、幸運に恵まれることによつてのみこの幸福に達することができるのである (図3①)。一方心理的幸福とはある瞬間に感じる幸福感のことである。これには良い欲望と悪い欲望、正しい欲望と間違つた欲望との区別がなく、そのときに欲しいものを手に入れることによつて満たされる (図3②)。この2つの幸福の違いを欲望におきかえて考えてみると、^{フロンツ}欲求と^{ニース}必要の違いとすることができる。心理的幸福は、後天的な欲望で個人個人、その時々で違つて欲求と関わっている。これは欲しいと思つたときだけ良いものに見えるものを欲する欲望である (図3④)。これに対して倫理的幸福は、先天的な欲望で全てのの人に共通な必要と関わっている。必要

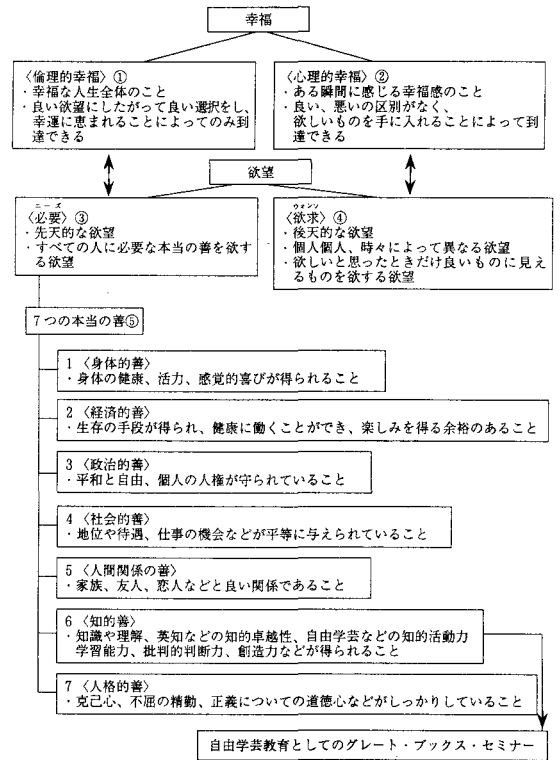


図3：幸福と自由学芸教育

はすべての人に必要な本当の善を欲する欲望であり (図3③)、本当の善には次の7つのものがある (図3⑤)²⁰⁾。まず1つ目は身体的善で、これは身体が健康で活力に満ち、感覚的喜びが得られることである。次に経済的善で、生きていくのに十分な生活の手段が得られ、健康に働くことができ、さまざまな楽しみを得られる経済的余裕があることである。3つめは政治的善で、平和と自由、個人の人権が保証されていることである。4つめは社会的善で、地位や待遇、仕事の機会などが平等に与えられていることである。5つめは人間関係の善で、家族や友達、恋人などと良い関係であることである。6つめは知的善で、知識や理解、英知などの知的卓越性、自由学芸などの知的活動力、学習能力、批判的判断力、創造力等が得られることである。そして最後が人格的善で、克己心や不屈の精神、正義についての道徳心等がしっかりしていることである。自由学芸教育としてのグレート・ブックス・セミナーは、これら7つの善のうち6つめの知的善と深く関わっている。私たちは、グレート・ブックスを読み、その中から真実を拾い出す作業を通じて、知識を得、理解力や学習能力、批判的判断力を身に付けることができ

るのである。

このようなグレート・ブックス・セミナーを「生涯にわたって」受けるべき理由として、アドラーは次の3つを挙げている²¹⁾。

1. グレート・ブックスの性質によるもの

グレート・ブックスは一度読んだだけでその内容が十分理解できるものではない。何度も繰り返し読むことによって新たな発見があり、新たな真理を導き出すことができるのである。

2. 心の性質によるもの

私たちは体の健康を保つために、毎日食事をとっている。先週の食事でも今週の健康を保とうという人は誰もいない。これと同じように心の健康を保つためには、毎日心の栄養をとる必要があるのである。大学時代の学習で生涯の心の健康は保てないのである。

3. 学習の最終目標の性質によるもの

学習の最終目標とは、英知ワイズダムのことである。英知は知識として学ぶことができない。生涯を通して様々な経験をすることによってのみ達することができるのである。したがって、私たちは一般的でリベラルな自由学芸教育を生涯にわたってうける必要があるのである。

4. グレート・ブックス・セミナーのテキスト

グレート・ブックス・セミナーのテキストとなる『Great Books of the Western World』は全54冊からなる西洋古典全集である。そのうちの2冊が『The Great Ideas, Syntopicon』であり、このシントピコンこそグレート・ブックス・セミナーを支えるアドラーの読書論を象徴するものなのである。アドラーは、読書は本来積極的なものであり、積極的読書のためには高度な読書技術が必要となると述べている²²⁾。その積極的読書の最終目標がシントピカル読書リーディングなのである²³⁾。シントピカル読書とはひとつのテーマにしたがって何冊もの本を読み込んでいく読書方法である(図4)。

グレート・ブックス・セミナーで扱われるテーマは、平和や平等、愛や幸福などいずれも人間の本質を考える上で欠かせない重要な概念である。シントピカル読書リーディングではこのようなテーマを読者が設定し(図4①)、まずそのテーマに関する本を網羅的に収集する(図4②)。

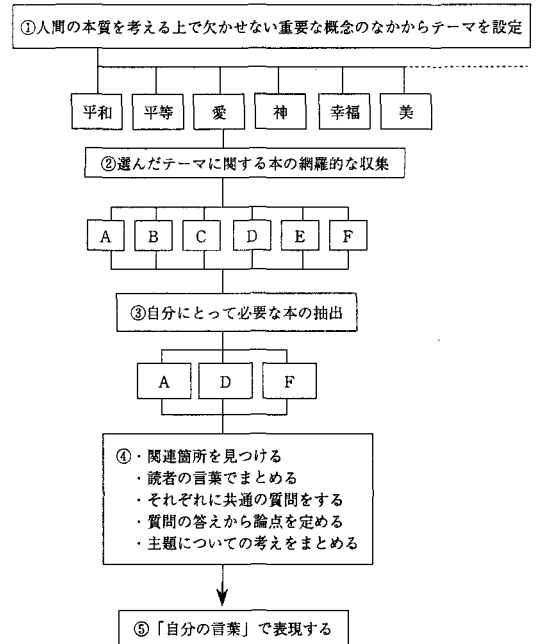


図4：シントピカル読書

の概要をつかみ多くの本の中から必要なものを抽出する(図4③)。更にそれぞれの本から自分が問題とする関連箇所を見つけ、それを読者自身の言葉で整理する。それができたら、その問題を解く鍵となる一連の質問を決め、その答えの相違から論点をはっきりさせて論考を重ねる(図4④)。そして最後に自分の言葉でそのテーマについての考えを表現するのである(図4⑤)。

シントピカル読書リーディングの大方の流れはこのようなものであるが、その意図するところは、人間をとり囲む様々なことごとらについてあらゆる側面から客観的に見つけ、それによってそのことごとらの本質を導きだすことにある。そして基本的概念・問題への理解を広げ、深めるのである。

このようなシントピカル読書リーディングの考え方にに基づき、それを手助けするものとして開発されたのが『Great Books of the Western World』である。その構成は次のようになっている²⁴⁾(図5)。

アドラーらは、シントピカル読書リーディングのテーマに選ぶべき重要な概念として102の重要な概念グレート・アイディアズを挙げている。そしてそのそれぞれの重要な概念について図に表されているようなチャプターグレート・アイディアズが設けられているのである。「イントロダクション」はその重要な概念に関する概要がまとめられており(図5①)、「アウトライン・オ

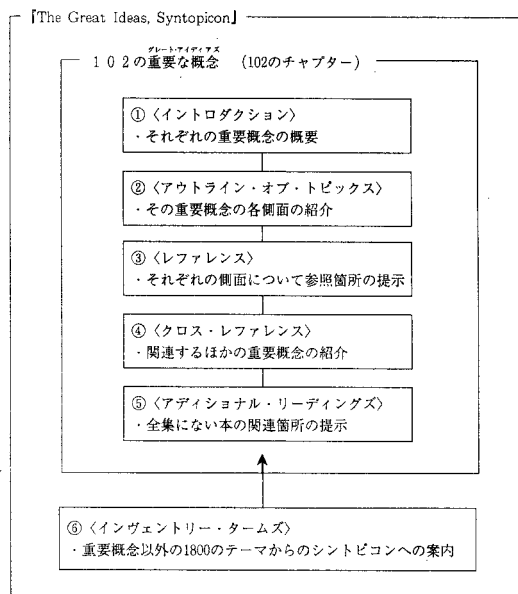


図5：『The Great Ideas, Syntopicon』の構成

「ブ・トピックス」ではその重要な概念がどのような側面に分けて考えられるのか、その各側面がひとつのトピックスとして紹介されている（図5②）。「レファレンス」ではそのトピックスにしたがって、それぞれのトピックスをより深く理解するためには何巻のどこを読めばよいかを示されている（図5③）。そして「クロス・レファレンス」で、その重要な概念に関連するほかの重要な概念が紹介され、また別の側面から理解を広め、深められるようになっているのである（図5④）。更に「アディショナル・リーディングズ」では『Great Books of the Western World』に収録されていない本についても、その重要な概念に関連する箇所がわかるようになっている（図5⑤）。また、すべてのチャプターの最後には102の重要な概念に選ばれていない1800のテーマからもこの『The Great Ideas, Syntopicon』に入っていけるように「インヴェントリー・タームズ」が設けられている（図5⑥）。

このように『The Great Ideas, Syntopicon』では、ひとつのテーマについてあらゆる側面から理解を深めることができるようになっているのである。

そのシントピコンと対応する『Great Books of the Western World』には443の作品が選ばれているわけであるが、その選出基準として編者の一人であるスコット・ブキャナン（Scott Buchanan 1895-1968）は次の

5点を挙げている²⁵⁾。

1. 何世紀にもわたって多くの人に読まれてきた本
 2. 何通りもの解釈のできる本
 3. 容易には答えられない永遠の問題を提起する本
 4. ひとつの卓越した芸術作品といえる本
 5. 自由学芸の教材として優れている本
- アドラーはこれに加えて

1. 討論に値する本
2. 繰り返し何度も読むに値する本
3. 教養書として素人にもわかる本
4. あらゆる学問分野から選ばれた本
5. 1～4の条件をすべて満たしている本

を挙げている²⁶⁾。このような基準によって選ばれたのが『Great Books of the Western World』に収録されている作品なのである。全集を西洋古典に限った理由についてアドラーは、自文化の起源を理解するだけで十分に困難なこと、その作業を終えて初めて安心して異なる文化を理解する作業にとりかかれること、また現代作品は時代を経っていないという意味で優れた作品か否かを評価するのが難しいことをことわっている²⁷⁾。しかしながら、現代社会を理解するために把握すべき概念は年々増えてきている。これを補うために、新しい概念や新しい作品を紹介する『The Great Ideas Today』が毎年発行され、1990年には新たに6冊を加えた全60冊の『Great Books of the Western World』の改訂版が出版されている。

5. まとめ

今日、経済発展や自由時間の増大などにより、余暇・レジャーを重視する人々が増えている。このような中でレジャーの問題は「自由時間をいかに過ごすか」というだけでなく「自由時間を使っていかに人間性を高めるか」という点が重要になってきている。教育の面からこのことを考えると、人間性を高め、真の教養を養う自由学芸教育がレジャーのための教育として重要であると考えられる。

また、私たちは、環境問題や核の問題、民族紛争など地球的規模の様々な問題を抱えている。いまや、これらの問題はその当時国のもものだけではなく、地球に住むひとりひとりの問題となっている。さらに、わが国においては冷戦構造の崩壊や終身雇用の見直しなどでこれまで一般的であった世界観、人生観が当てにな

らなくなってきており、人々は新しい心の拠り所を求めている。このようなことから、現在のような暗記にばかり頼った教育、あるいは職業化専門化に偏った教育ではなく、自分で考え、学び、主体的に判断する力を養う自由学芸教育がこれからますます重要となってくると思われる。

本論文では、この自由学芸教育の具体的方法の一つとしてグレート・ブックス・セミナーを提案した。このセミナーの発展の歴史を辿り、その教育理念を明らかにし、セミナーのテキストとなる全集の構成を検証することによって、以下の3点においてこのセミナーが自由学芸教育として戦略的にプログラムされていることが確認された。

1. 自由学芸教育は、生涯を通じてなされるべきである。グレート・ブックス・セミナーのプログラムには、小・中・高校生向け、大学生向け、社会人向けのものがあり、生涯を通じて一貫した教育を受けることができるようプログラムされている。
2. 自由学芸教育は、民主的社會を支える市民を育てる教育であると同時に、人々が幸福な人生を送る手助けとなる教育でもなければならない。グレート・ブックス・セミナーはそのような教育理念の基に作られている。
3. 自由学芸教育は、誰もが、いつでもどこでも受けられることが理想である。グレート・ブックス・セミナーには、そのためのよいテキストがある。

また、本論文では扱えなかった以下の点を今後の課題とした。

1. 具体的にどのような形のセミナーが行われているのか。形式だけではなく、内容にまで踏み込んだ調査をする。
2. 自由学芸教育の中でのグレート・ブックス・セミナーの位置づけや、アメリカ社会における一般的な評価、その後の展開などについて、文献及び実地調査を行う。
3. テキストは西洋古典に限られているが、東洋の作品を扱うとすれば、どの著作を扱い、どのような概念について討論すべきか。これまで出版された全集などを参考に検討する。

最終的には、実際に現代日本社会にあったグレート・ブックス・セミナーを企画し、より良いものへと改善していく必要があると考えられる。

- 1) 生活科学情報センター：余暇・レジャー総合統計年報'95, p384, 食品流通情報センター, 1995.
- 2) レジャーがそれをする事自体に目的があるのに対して、ワークとは、何か別なところに目的のある労働のことである。古代ギリシアではレジャーのことをスコレー（現在のスクールの語源でもある）といい、その否定形のアスコリアがワークを意味していた。
- 3) 通常、自由学芸はliberal artsの訳語であるが、ここではliberal education を自由学芸教育と訳した。詳しくは松田義幸：現代レジャー論（5）レジャーとしての自由学芸教育, 筑波大学体育科学系紀要, 14号, pp.275-284, 1991.
- 4) ヨゼフ・ピーパー（稲垣良典訳）：余暇と祝祭, p56, 講談社学術文庫, 1988.
- 5) M. J. アドラー, 佐藤三郎：教育改革宣言, 教育開発研究所, 1984. 佐藤三郎：アメリカにおける教育課程を中心とした改革の動向について, 大阪経済法科大学論集, 55号, pp.65-86, 1994. など
- 6) Adler, M. J. : How to Read a Book, Simon and Schuster, 1940.
- 7) M. J. アドラー, チャールズ ヴァン ドーレン（外山滋比古, 槇未知子訳）：本を読む本ー読書家をめざす人へ, (まえがき), 日本ブリタニカ, 1978.
- 8) Adler, M. J. Gorman, William : Great Books of the Western World, Encyclopaedia Britannica Inc., 1952.
- 9) 1990年に改訂版が出され、現在は60冊の全集となっている。
- 10) Hutchins, Robert M. : The Learning Society, Frederic A. Praeger Publishers, 1968.
- 11) Adler, M. J. : The Paideia Proposal-An Educational Manifesto-, Macmillan Pub. Com., 1982.
- 12) Ibid., p.22.
- 13) Adler, M. J. : Reforming Education-The Opening of the American Mind-, p278, Macmillan Pub. Com., 1988.
- 14) Adler : The Paideia Proposal, p.4.
- 15) Hutchins : op.cit., p.31.
- 16) Adler : Reforming Education, p.45.

- 17) Ibid., p.143.
- 18) Ibid., p.151.
- 19) Ibid., pp.81-9.
- 20) Ibid., pp.85-6.
- 21) Ibid., p.220,p.223.
- 22) M.J. アドラー, チャールズ ヴァン ドーレン
(外山滋比古, 榎未知子訳) : 前掲書. pp.4-12.
- 23) 同上, pp.190-213.
- 24) Adler, M. J. Gorman,William : Great Books
of the Western World 2 The Great Ideas I,
Great Books of the Western World 3 The
Great Ideas II, Encyclopaedia Britannica
Inc., 1952.
- 25) Adler : Reforming Education, p.333.
- 26) Ibid., pp.333-4.
- 27) Ibid., p.321.